



川内康範

骨まで愛して



© Kohan Kawauchi 1966

昭和41年5月10日 第1刷発行

¥ 320

著者	かわ うち こうはん 川 内 康 範
発行者	野 間 省 一
印刷所	豊国印刷株式会社
製本所	横田製本株式会社

発行所 東京都文京区音羽町3-19 株式会社講談社
電話 東京 942-1111 (大代表)
振替 東京 3 9 3 0

(落丁本・乱丁本はお取りかえいたします)

目次

第一章 木蔦の抄

5

第二章 破花の抄

87

第三章 氷雨の抄

171

題 裝
字 幀

曾 田
根 中
聖 一
山 光

骨
ま
で
愛
し
て

第一章 木蔦の抄

一

その人は、陽の当たらぬ場所に生きていた。どこで生まれ、どのような育ちをしたかは知らない。

私はもともと、他人の戸籍調べには興味をもたなかったし、その人も語ろうとはしなかった。特定のだれそれに紹介をされたわけでもない。

私はそのころ、とても貧乏で、安い値段の部屋をさがしていた。二十九歳、売文の徒を冷笑する文学青年であった。

私とその人との、出会いの契機けいきは、不動産屋を仲介としてつくられた。

「たまに部屋代をためることもあるはずです。でも、きっと払います。それでよければ貸してください」

私は率直に家主に頼んだ。

六畳一間が二千円だった。

神林あや子——という表札がかかっていた。その人の名前であった。十五坪ほどのちいさな二階建ての一軒家で、玄関を入るとすぐ右手に応接室があった。部屋数は下が三つに二階が二間らしかった。

家族構成は、神林あや子のほかに婆やばあが一人。私をふくめて三名ということになるが……ほかにもう一人、不在家主のように青木という旦那だんながいるのだった。

目黒、柿ノ木坂の静かな住宅街の一角であった。神林あや子は、そこで静かに暮らしていた。すくなくもよそ目にはそう見えた。

「品のいい奥さんでネ、もとミス東京だったくらいだから、なかなかの大型美人だよ」

不動産屋は、たずねられもしないのにその人の説明をした。そして、私に暴力に対して自信はあるかと訊いたりした。

「暴力なんてこわかないよ」

「柔道でもやるんですか？」

「柔道はダメだが、気合い術はやるよ」

「そりゃアおもしろいネ。奥さん、よろこびますよ」

一方交通の感じで不動産屋は私を世話したのだった。暴力に強い——と訊いたのは、とりたてて事情があるわけではなかった。そのころ、目黒界隈かいわいには押し込み強盗が流行していた。終戦

七年目の晩夏であった。

私に応接室を貸してくれたのは、どうやら用心棒がわりのつもりであったようだ。それに、物書きだから、終日部屋に閉じこもっている……という解釈が神林家にはあったようだ。事実、私は、いつも部屋に閉じこもっていた。たまに外出をするときは、海外同胞の引き揚げ運動をやるためだった。あとは、電車賃がもったいないし、外食券食堂をさがすのがめんどうなのでなるべく動かないようにしているのだった。

そのころ、私はとても貧乏であった。長いあいだの貧しさになれて、それほど苦にはならなかったが、金銭の効用は知っていた。そのくせ、だれかと食事でもすると、おごつてもらうのがいやで、つい会計伝票を自分が握ってしまう。だから、わがふところの貧しさを守るためには、できるかぎり外出をしないで、近くの道を散歩なぞしているほうが得策なのだった。

神林家に間借りをしてから、五日間ほどは、まったくその人と口をきくことがなかった。たまに婆やが掃除をしに来て、れいによって、たずねもしないことを言ったりした。それによると、神林あや子は、私より二つ歳が上らしい。美人薄命のタイプで、いつも死にたがっているとか、きわめて不幸な毎日をおくっていると……不動産屋とは逆な、それでいてきわめて断片的なことばかりを告げた。

「死にたい人は死なせたほうがいいですよ。そのほうが本当の親切かもしれない」

私は、婆やの相手をしているのがわずらわしくなつてそう言った。しょせん、他人のことはわからないというのが私の人生観の根底にあったからである。なんであろうと、因果の理法から説

けば、己が身から出たことにちがいないし、人間の生死は他人によって拘束されるべきものではないという考えがあった。

そうしたある真夜中、とつぜん私は神林あや子の心の刺青を見てしまったのだった。二階のほうで女の泣き叫ぶ声がした。だれかがどなり散らしている。旦那の青木が来てあや子と口論をしているのだった。青木はこの同じ目黒区内に住む電球工場の経営者で、区会議員の肩書きをもっているとのことだった。

私は引越した翌日に一度、それから玄関で一度と、それまでに二度顔をあわせていた。小肥りの人のよさそうな顔をしていた。とても、女を悪しざまに罵ったり殴りつけたりするタイプには見えない。

その青木が、大声にわめき、どうやらあや子をつかんしているらしい。なにか器物のこわれる音がした。事情はどうあろうと、放っておけば、いまにも流血の惨事が起きそうな気配だった。晩夏といっても、まだ残暑のため、私は窓をあけていた。だから、二階の物音がじかに伝わってくるのだが……。

「俺の名誉に傷をつけるつもりか！」

はつきりと、そんな声がきこえてきた。それに抗して、「死んでやる！」というあや子の叫び声が私の耳に入ってきた。そのとき、婆やが部屋へ入ってきたのだった。

「とめてください。とてもあたしの手には……」

はじめて知ったのだが、婆やはさっきから二階で仲裁役を買っていたのだった。それとも、つ

いさっき上がっていったのかもしれないが……。とにかく、奥さんはやけっぱちになっているから、本当に自殺をするかもしれない——というのだった。

「他人が入ってもしかたがないんじゃないかな？」

私はつぶやいた。

「そんな冷たいことを言わないで……」

婆やは哀願した。

「やめろ！ バカなことをするな！」

また、青木の声がした。ただ、となりつけているのではなく、その声にはなにかにしがみつくようなひびきがあった。

私が二階に入って行ったとき、あや子は左手首から血をしたたらせて、旦那に日本カミソリを取り上げられているところだった。

「医者を呼んできましょう」

私はすぐに階段を下りようとした。それを追って来て旦那が言った。

「困る。世間に知れては困るんだ」

私ははっとして青木をみつめた。あわれなほど彼は狼狽ろうばいしていた。その洋服の衿に、区会議員のバッジがついていた。

あや子は、婆やに傷の手当てをしてもらいながら泣きじゃくっていた。その横顔が、妙に、三十女を感じさせない稚さおとなだった。

「たいした傷じゃないんです。ときどき発作を起こすんですよ。どうも陰の女ってやつはコンプレックスがつよくて——被害妄想ですよ」

申しわけのつもりか、青木は私に早口にそう言った。言外にふくめて、だれにも言わないでくれとその目は哀訴していた。

二

私は黙って自室にひき下がった。

あと味のわるい芝居の幕切れを見せつけられたような苦渋があった。

あや子は、なぜ自分を傷つけた刃をもつて、憎い青木を刺そうとはしなかったのか？ 本当に死ぬ覚悟があるのなら、いつでも自殺は可能はずである。これをしないでカミソリをふりまわす女の気持ちは、とても微温的で、それこそ妄想的で、私は同情をする気持ちにはなれなかった。

ただ、なぜだか、一瞬の間に見た、あや子の横顔の稚さと、手首から吹き出していた鮮やかな血の色が、それからしばらくのあいだ私の眼底にのこっていた。三日ほど、私はあや子と顔をあわせることがなかった。婆やが礼にやってきたが、それは、青木に頼まれて口どめに来たのだった。

「つまらんことですからね、しゃべりようがないですよ」

私は不機嫌にこたえた。いったい、青木は、そんなに世間が気になるのなら、錢で女をかこつたりしなければいいのである。氣にするほどの名誉や地位でもあるまいし、私は腹立たしくなつて婆やに言つた。

「どっちが嫉妬深いの？」

「そりゃア旦那さまのほうですよ。あれだけの美女はめつたにみつかりませんからね。それに、商売人上がりじゃなし……」

「なにが氣にくわんです。死にたいなんて、かろがろしく口にすべきことじゃないでしょ」

「本当の奥さんになりたいんですよ。でなけりゃ別れてくれって……いつでもそれがケンカのもつですよ」

「ふーん」

私はもう聞いてなかった。陰の女が本妻を押しつけて妻の座につこうとする。このありきたりの願望は小説の素材にもなりはしない。なるとすれば、一生を陰の女としての節義に生きぬいた女の物語でなければならぬ。

こうした女のほうが、はるかに光沢があり、その哀しみも味わい深いものにちがいない。どんな生き方をしようと、その人ならではの生き方をつらぬくことだ。それが、その人の生きた、愛した、いのちのあかしになるのだが……と、私はそんなことをまさぐっていた。

だが、私は、かんじんなことを忘れていた。陰の女の節義といつても、それは「愛」が実在し得ることなのだ。神林あや子は、そのかんじんな愛情を青木に抱いていないのだった。

妻の座を求めていたのは、俗世間の常識にしたがってのことで、青木との結婚には、いまさら愛情は不要だとの彼女の考えが根底にあるのだった。それとても、どうしても結婚をしたい……というのではなく、ムリねだりをすれば、青木が別れてくれると計算しての果たし状であったという。

「愛してれば、一生陰の女でも結構ですよ」

あや子は私に明言した。婆やがどんな報告をしたのか、その日の夕暮れに、手首をホウタイで巻いたあや子が私の部屋を訪ねてきたのだった。

「あなた、軽蔑けいべつなさってるでしょ」

座るとすぐ、先日の礼を言ったあとに、あや子は一足飛びにそう言ったのだった。どういふのか、目がいたずらっぽく笑っていた。ふとあの稚さがよぎった。笑ったり、泣いたりすると、稚い面影がよみがえるようだった。

「私、結婚の星はないのよ。前に失敗してるし、魅力を感じないわ」

「性格が家庭的じゃないんでしょ」

「姉も妹も、いい奥さまになってるけど、父は私を、女房タイプじゃないって」

「失敗したから、そう判断したんでしょ」

「そうね。でも、私はもうこりごりよ。前のはお見合いだったけど……今度結婚するとしたら、恋愛して、どうしてもいっしょにいたくなったらするわ」

「でも、いまのままじゃ困りましたね」

私は軽口をたたいた。ハナシをしてみると、けっして陰の人でありがちな暗い人でも、自己を卑下ひげしているというようなところはないのだった。

「本当よ。愛情さえあれば、貧乏したって平気だわ。ただ、二号さんって言われるのがいやなのよ。だから、働かせてくれればいいのに……なんにもかも見てもらってたんじゃア息がつまって……」

あや子は嘆息して、それから「しかたがないわネ」とつぶやいてクスリと笑った。そのままの姿勢で、

「また寄せてくださいね」

すいと、泳ぐようにおじぎした。衿足が暮色の中で、匂におうようなやわらかさで私の目をなぜた。なにかはわからないが、年上の女の魅力を、黙って、立ち居ふるまいで異性に感じさせる女性のようであった。

三

私と神林あや子は、急速に接近していった。

危険な予感がしきりにしていた。それは、あや子が他人のものであるからでもあったが、それよりも、私に警戒の念をおこさせたのは、あや子のアンバランスな性情にあった。

結婚に失敗したのは、家庭的じゃなかったからだという。貧乏がきらいだし、性格的にも夫と

そりがあわなかったというが、そのほかに、なにか重大な原因がかくされているようだった。

青木との結びつきは、破婚のあとに、たまたま青木の電球工場の事務員として働いたときにできたものらしい。そのまま、青木の強引^{ごういん}さにひきずりこまれて、いまの生活に入ったものらしいが……青木が強引にあや子を掴^{つか}んだのには、それはそれなりに、そうせざるをえないような原因が、あや子の側にあったようだ。

だが、これはあくまでも私の憶測^{おくそく}で、しよせん他人の事情はのぞきえようもない。

私個人としては、あや子のような、妙な危機感をはらんだ女性に惹かれるところがあった。けっして女房にすべき女ではない。人の妻になって、夫の立身を助ける——といった貞女賢婦、あるいは、そっと邪魔^{じゃま}にならずに、連れ添った男のあとから従ってゆく——そういった従順平凡の型ではないのだった。

部屋代を出すと要^いらぬとかえしてよこした。私がそれでは心苦しいし、無料にしてもらう理由はないと申しでると、

「あたしが、いただいたつもりでいれば、いいんでしょう」

さりとて涼しい顔をして、けっして恩を押しつけるところがない。

「居づらくなりますから」

私はかえされた部屋代を無理にとつてもらった。

だれに対しても、いつでも対等の位置でいたい。うまく儲^{もろ}かったなどという安易さは私の性^{しやう}にあわなかった。あや子はそれを諒^{りやう}としたが、そのままひっこまないとところに彼女の性格があ